

# 健康教育としての「死生学」教育実践とその成果

## Death Education & Thanatology from a Viewpoint of Health Education

次世代教育学部学級経営学科

太田 裕造

OHTA, Yuzo

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部乳幼児教育学科

志田 久美子

SHIDA, Kumiko

Department of Early Childhood Education

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード**：健康教育 死生学 いのちの教育

**Abstract** : The purpose of this paper is to examine the deepening understanding of students' view of life, including the influences or ideas acquired after attending the lectures on death education as part of health education.

The following response was distinctively found : It is doubtful whether the problem of "death" or the final stage of one's life can be explored in the field of education. The mystery of "death" still remains to be explained, though problems of "life" have been clarified to a considerable extent. Thinking of death in terms of science is almost impossible, but the lectures gave us a rare opportunity to understanding its importance.

To consider the subject of death leads to the philosophical study of the essential significance of life, and this should be the research of thanatology or the view of life and death.

**Keywords** : thanatology, death education, health education

### はじめに

最近、われわれの周りで死への想いや準備も出来ないまま突然死（自殺、事故死、自然災害による死など）が増加している。死とは何か、死後はどうなるのかなど死への恐怖と不安は誰もが抱く自然な感情であろう。この世の人生をよりよく生きるために死を深くみつめる、死と向かい合って自分の命を最期まで生きるためにはどうしたらよいかなど、「死生学」による死の哲学は命への気づきのために必要不可欠な教育といっても過言ではない。また、いかに健やかに生きるかという健康教育の基本としてもその根幹を成すものである。

学校教育現場では、登校拒否・いじめ・校内暴力など様々な困難な課題や問題行動の原因を抱えているが、その背景の一つとして、物の豊かさに比べてこころの豊かさが十分身につけていないことから起因していると指摘されてきた。80年代後半から文部省教育課程審

議会でも道德教育の充実を重視した改善方針（「生命を尊ぶ心を育てる指導」小学校・中学校）を示してきた。その中で、「生命を尊ぶ」「生命を尊ぶ心を育てる」「生命について考える」として具体的な豊富な事例を挙げながら指導要領に教育内容を提示したのである。しかしながら、その実を見ないままの現状である。

わが国では、戦後の復興以降70年代からひたすら経済優先に走り、物質的豊かな生活を築いてきた。そこでは創造と建設に向かったの労働力が求められ生産力旺盛な世代のみに目が奪われがちで生産活動に直接携わらない高齢者たちは疎んじられる傾向であった。一方、生活諸条件の改善から平均余命の延長によって死が日常から遠いものになった。右肩上がりの発展上昇のみを想定してきた現代社会では、死に疎い集団によって成り立ち、衰退や死は禁句であった。さらに、誰も死を避けることはできない現実であるにも拘らず、生命科学技術のもとに延命医療が進み、死の問題はあたかも忘れてしまっているかのように触れたがらない

事柄となった時代推移である。

1980年代初期から“死への準備教育”を進め、その後、日本全国各地に市民レベルの「生と死を考える会」セミナーの発展の基礎を創ったA. デーケン教授（元上智大学。現在、在独）は、死を自然な現象として受けとめ自由に語り合えるような新たな死の文化を創造していくことが必要であろうと提言してきた。医学が発達し延命のための医療技術は急速な進歩を遂げた一方で死はますます日常生活から遠ざけられてしまった。医学の発達と死のタブー視、この悪循環は死への準備、死に対する心構えを学ぶ機会を失わせ、一層死をタブーとさせていく。死をタブー視することは生に対する自由な考え方を束縛したり、死をタブー視していると真に死（生）についての人間的なコミュニケーションを深めることができない、とデーケンは述べている<sup>(1)</sup>。一方、自殺や事故死など突然死が増えてきた現代社会は個人的・社会的に多くの問題を抱えている。そこで、普段から自分の生命の終わり方についてどうありたいか、元気なうちに自分自身の考えではっきり方向づけておくことも必要であろう。

### 初等教育における「死生学」の実践

“いのちの教育”は幼児期から絵本のよみ聞かせなどからの教育実践例も見られ<sup>(2)</sup><sup>(7)</sup>、また小中高では道徳の時間においては生命を尊ぶ心を大切にしながら多様な人間のあり方やものの見方に触れさせ、より高められた命を畏敬する心に照らして自己を振り返らせることがねらいでおこなわれる。また道徳教育だけではなく諸々の教科でも教育活動を通じて、命を尊ぶ心に目を向けさせ、豊かな感受性を育てる教育指導をおこなっている。そこでは学校教育だけでなく家庭、地域社会との連携を図りながらの協力体制が必要であるとして家庭や地域社会との連携でものを大切にする心や自然の生き物を大切にする心情や、自然環境を保全する生活行動の実践力を高めることなども含まれる。

### 高等教育における「死生学」の実践

さらに、高等教育では「死生学」を通して自らの人生と生命を哲学させる。それは、近年のわが国での社会様相の変化として、(1)死の場所が自宅から病院や施設へ移ったこと、(2)核家族化によって死に直面する経験が減少したこと、(3)長寿社会を迎えて死に関する体験や認識が希薄になったこと、(4)医療技術の進歩によ

り死の判定や死の決定上の死の倫理に医療上の新たな問題を提起したことなど（木村,1990）から、その課題の解決にむけて「死生学」を学ぶ意義があると捉えるからである。

\*死生学 (thanatology) とは、死にかかわりのあるテーマに対して学際的に取り組む学問領域である。thanato-の語源はギリシャ語で死の意。死生学では、死生観の形成を哲学・医学・心理学・民俗学・文化人類学・宗教・芸術などのあらゆる研究からアプローチする。

若い健康な人々にとっては老人施設、ホスピスなどでのボランティア活動によって、人が老いていくこと死んで逝くことを知り、老いへの道のりと死を迎える道程を知ることは、今のいのちをいきいきと生きることにつながるのである。

かつて「保健の科学」で、“死の教育をめぐる”の特集号が組まれた（1987, Vol.29）。その中で、「健康を論じるとき、その最大の危険因子であり対立概念である死のことなど論議しても無駄だ」という意見もあろうかと思う。しかし、健康が生命現象の実態である以上その内部には死が内在していると言える。生と死は二面的に別々に理解すべきものではなく、生と死は同じ次元にあるものと認識すべきである。…健康の重要性を今更強調する必要もあるまい。ただ、ここで要望したいのは健康の維持増進のための実践保健学の推進に際して健康のライフサイクルに死の存在を認識して欲しいということである。健康を強調する時の背景には死を無視した健康ではなく死を乗り越えることのできる健康概念が望ましいと考える。死を回避するだけの健康ではなく、健康が害され死が回避できない場面においてもその死を迎えることのできる精神構造をもった健康観の確立がこれからの課題であろう。人間は最終的に死を迎えることになる。その死に対して健康は無意味ではなく究極的には理解し難いと思われるが死を受容できる健康が理想であろう」の見解がみられる。

誰でも抱く死への恐怖とは、未知なるものへの恐怖、孤独への恐怖、自己の消滅への恐怖、死の苦痛への恐怖、死によって家族・社会の負担になることへの恐怖、不完全なまま人生を終えることへの不安、死後の審判や罪に関する不安など様々なものがあるであろう。しかし、死への恐怖には、今まで気づかなかった潜在能力の開発を促すという側面もある。死への恐怖は自己の有限性を自覚させ創造性を発揮させるという積極的な機能もある。文学、音楽、美術など芸術のいろいろの面で

も死をテーマとして扱ってきた。わが国で、13世紀鎌倉時代の「九相詩絵巻」では死後に九つの相（すがた）に変わる様相を描いているが、死から目を逸らさず大きな視野で生を考える文化であった。また、西洋では、古代ローマにその起源があるとするキリスト教思想を背景にしたメメント・モリ（memento mori：「死を想え！」の意。）の教えがある。これらは洋の東西を問わず、死を忌避しないで、死をみつめることによって始めて命との出会い、命への気づき、また生（命）を見つめることが出来る、それは、単に生命の長さだけではなく質の高い、充実した人生を送り、やがて死への道を歩むことができるようになるという側面をもっているのである。それが現在で言うQOLというものである。

## I. 研究目的

著者は数年来、健康教育『ウエルネス論』の中で、「生と死の教育」というサブテーマでの講義を行ってきたが、死のテーマを扱う理由は、現在日本社会の様相が急変し、死を考える問題を回避し得ない状況が生じてきたからである。学校教育現場ではいじめによる自殺、また子どもたちばかりではなく中年期における自殺も増加傾向であり、さらに事故などを含む突然死が増えていることもある。その社会の変化に対応した生と死を考えさせる教育内容を設定しなければならないと日々考えていたからである。将来、教師を志向する教育学部の受講生たちにこのテーマについて講義するがよろしいかと予告したところ多くの賛同が得られたところから始まったのであった。

生命存在のあり方や生命倫理については、倫理学や哲学の領域として大学教養科目においても開講されている。しかし、死の問題については日本の高等教育の中にカリキュラムとしては含まれていない。僅かに、医学部の医学・看護学の専門教育の中に一部取り入れられているに過ぎない。

1年次後期開講の専門基礎科目「健康科学概論」では、「死生学」のテーマで3回の講義をおこなう。そのねらいは、教育学部の学生たちは卒業後教職に就き、児童生徒に“いのちの大切さ”を教え、生命への畏敬の念と自他の生命尊重を教える人権教育をおこなう、また、いじめ等によって自殺に追い込まれないように対応した生徒指導をする立場に立つのである。その準備教育の必要性からでもある。勿論、受講生自身が自らの生命を哲学し、心身のコントロール能力を高め、

生涯にわたって健やかに生きる生活技術の基礎を身につけるためでもある。本稿では、著者がかつて実践してきたその「死生学」の教育成果を、受講生の反応から検証することが目的である。

## II. 研究方法

半期全15回の講義のうち「死生学」については3回講義した。そのサブテーマとして、(1)いのちの教育—いのちの誕生と連続性—、(2)死の教育—死を学ぶ「死生観」について—、(3)生命倫理—社会科学からのアプローチ—、を設定した。この講義の受講生は教育学部であり、その専門は自然科学系、人文社会科学系、芸術・スポーツ系と様々であった。毎回の受講後に講義内容の受け止め方とテーマに対するレポートを提出させた。結果的にレポート（A4 1,400字）は345枚を数えた。そのレポート内容から、いのちの教育のねらいや死生観の形成に成果が表れたか検証する。また、教育学部学生と対比させた基礎医学における「死生学」教育については、医科系短期大学・大学における教育実践例を文献検索し、その一部の内容について引用して参考資料とした。

## III. 研究結果

以下は、受講生の講義に対する授業評価—「死生学」から学んだこと—である。

### 大学生の死生観

「一般的に死は考えたことはあっても“自分の死”は考えたことは全くなかったと気付かされた。」

「決して誰もが避けて通れない問題であるのに、死はどうも先のこと自分には関係のないことと捉えがちだ。しかし、“忌み嫌う”という風潮もあってか避けがちだが、いつなにか起こるか分からない現代だからこそ、また、自分を見つめ直す機会としても死を考えてみるべきかもしれないと思った。」

「興味もてるテーマでした。普段、死について考えることは少なくまだ自分には関係がないことと思っておりましたが祖母が亡くなった時、祖母の元気だった頃とはうって変わって祖父や母も魂が抜けたみたいに光を失い家が暗くなって、祖母がいなくなったことで人間関係に隙間が出来たことを感じた。そのとき死の

意味を知ったし、その人の存在を知った。だから、本当は死についていつも考えていなければならないと思った。…」

「生と死というものは、常に私達に関係しているものであり、常に隣合っている。普通、“生”といえばエネルギー感で若さを感じ、“死”といえば老いたものの方がイメージされやすいような気がするが実際は違う。事故や病気、自殺など死の形は様々であり、いつ誰の身に起こるか誰にも分からない。すごく元気だった人に次の日突然に死が訪れたりすることも少なくない。生と死は薄い膜のようなもので分かれていて、その膜は非常に脆く何がきっかけで破れるか分からないものとも言えるだろう。今日、殺人事件や自殺が多発している。人の命の尊さや生への関心が不足しているのではないだろうか。私自身も生への関心というのは薄い。日常生活の中で、生と向き合っているという実感や“私は生きている”と実感するようなことは殆どない。ただ平々凡々とこれといって熱中するものもないまま日々を過ごしているような気がする。しかし、このままでは良くないと思っている。…」

上記は、教育学部の学生たちの感想の数例であるが、死の臨床に立つことになる医科系の学生たちにおける死生学関連の情報を得たいと考えた。そこで、最近10年の「医学中央雑誌」に掲載された「死生観」に関する文献(1997～2007年)を検索した<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>。原著論文から、医科系大学の学生を対象にした死生学教育として死生観がどのように形成されたかなど一部を引用して紹介したい。原著論文23件の内訳は、死生観に関するもの、生と死の教育効果に関するもの、死生観形成に関するもの、自殺と死生観との関連、養護教育における死の準備教育に関するもの、スピリチュアリティに関するもの、などであった。概して、大学生の死生観の実態について調査した内容、死生観が自殺や臓器移植などどのような関連があるかを調べることを目的とした内容であった。

これらの原著論文では、看護大学生と医学生だけを対象としたものは比較的少なく、一般学生と看護系学生とを比較する形での論文が半数以上であったが、そのねらいは死生観の違いを明らかにしようとしたものであった<sup>(6)</sup>。

その中から一部を紹介すると、学生たちの多くは、“死を恐怖と感じている”“自己の死についてまだ認識していない”“身近なところで死に関わる体験をすることに

よって死について深く考え、命の大切さを感じるようになった”など前述の教育学部での学生の反応と同じ内容であった。看護学生と一般学生の比較をしたものでも、両者間で死生観の違いは見られなかった。つまり、学部での相違ではなく学生の死生観の形成に影響を与えるのは“生と死を考える”授業を受けたか否かに因るものである。また、一面では医学基礎教育として死生学を専門的に取り上げていないという側面もあるかと思う。身近な人の死の体験、生と死を考えさせる教育、これはさしずめ「死生学」教育の意義と意味を表しているものであると言えるだろう。

さて、本論文の基になった「死生学」講義では、受講感想だけではなく学生たちは受講内容をどう受け止めたかその教育成果を知るために次の5問を用意し、その反応を見た。

- Q1.「自分の死を思索し、また死を考えたことがありますか。また、それはどんな時ですか。」
- Q2.「人は何故に自殺するのでしょうか。あなたの考えを述べてください。」
- Q3.「生と死の関係性について、あなたの考えを聞かせてください。」
- Q4.「あなたが生きがいと充実感を感じることは何か、それはどんな時ですか。」
- Q5.「自己存在のありかたについて、あなたの考えを述べてください。」

また、最後に授業感想も書いてもらった。

表1は、「自分の死を思索し、また死を考えたことがありますか。」の問いに対する応えの一部をまとめたものである。身内とか身近な人の死に直面して初めて死のことを考えるのが普通であろう。しかし、大学生では日頃から死について思索することがあるようである。

“生の意義について考える時に死についても考える”，“人生を深く考え、生きる意味がわからなくなる時に死を考える”とある。

“死ぬことは何だろう。そう考える以上に生きることとは何だろう、そう考えることの方が余程難しい。死んだら何もかもおわり。その続きはない。だから、生きる、何のためか、そして何を求めて?でも生きる。私は生きているから”

また、大学生たちの抱く死のイメージで最も多いのは“恐怖”であるが、“やすらか”“美しい”と美化したものもある。



表1 「自己の死を考える」

- ・身近な人の死に直面した時、自分の存在について考える。
- ・肉親を事故で無くした時、命のはかなくて脆いものだと思った。だからこそ今を、生きていこうと考えていくようになった。
- ・人生を深く考え、生きる意味が分からなくなる時。虚無感がこころを支配した時
- ・生の意義について考える時に死についても考える。具体的に死の実体を意識するというよりも謎に満ちた死への知的探求と言える。
- ・誰かの死と直面した時などではなく、ある時急に死について考えることがある。
- ・死ぬとはどんなことなんだろうと考えることは幼い頃からよくあった。死んだ後、私はどうなるのだろうと考えた時、意思をもたずただ闇をさまようのではないかともの凄く怖かった。
- ・自分が陥っている厭な状況に耐えられない、どんなに努力しても報われない先に希望がもてない自暴自棄になった時
- ・体の調子がひどく悪い時。悩んでつらくて楽になりたいと思った。
- ・一人で寂しく置いてきぼりにされたような気持ちの時
- ・つい最近、自分は誰にも必要とされていない、何もやることがない、生きていても意味がないと思い、死にたいと思った。
- ・自分が死ぬかも知れない病気にかかった時と自分の未来の展望が見えないことに驚きを感じ、うつ状態に陥った時

成長過程で、いつ頃から死のことを考えるようになるのだろうか。曾根ら<sup>(参考書2)</sup>は短大生を対象にした死についての意識「子どものころ死についてあるいは命に限りがあるということについて考えたことがありますか」と調査をおこなった。小中高生の時にふり返っての調査である。その結果によると、いのちを意識した年齢のピークが小学高学年（10～12歳）の時であった。この時期は第二次性徴期が始まる時期で、心身の発育と発達が著しくすすむ頃であることと関係しているのはエリクソンの発達理論からも肯かれるという。

“今回の講義では、「生と死の教育」としてQOLなどについて考えた。生とは今自分が生きているということだが、果たしてそれが本当の意味での「生」なのだろうかと考えた。生とは？ただ単に生きているだけの状態ではないように思われる。生きるということがどんなことなのか、そして、どのようにして生きるのかというそれぞれの意義について考えていくことをしなければ生を全うすることは出来ないと思う。そしてまた、「死」とは何なのだろうか。死について考えることはある意味とても恐ろしいものであるように思う。自分の命がなくなる、自分の時間が止まってしまうことには恐怖を感じずにはられない。しかし、死があるからこそ生があるといっても過言ではない。いつか訪れる死の瞬間のために今ある生をよりすばらしいものにするための努力を怠ってはならないのだと改めて思う。また、生と死とはそれほど遠いものではないと思う。生という状態があるように死という状態もある

のではないだろうか。今はまだ死について理解することは出来ないし考える機会も少ないが、いつか必ず直面する死のために今を精一杯生きていたいと思う。そう考えさせられる講義だった。…”

“今まで死についてあまり考えたことはありませんが、人は一人では生きてはおらず生かされているんだということはいつも考えています。だからこそ今を精一杯生きていたいと思っています。…”

“なぜ人は死ぬために生きるのかずっと考え続けてきました。しかし、死を受け入れることのできる健康な生を築くことで死を乗り越えよりよく生きていけると思った。死があるからこそよりよく生きていたいと思う。…”

表2は、「人は何故自殺するのでしょうか。あなたの考えを聞かせて下さい」への応えの一部である。

大学生を対象にした自殺意識についてのある調査によると、真剣に自殺を考えた割合は非常に少ないが早くから自殺を意識した者は“苦しみからの解放”と捉える一方で、“美しい、やすらか”など美化した死生観を持つということである<sup>(8)</sup>。また、一般的に死に関わる経験をしている学生ほど自殺を否定的に捉える傾向が強いということであるが、青年の自殺は年々に増加している。平成18年度の統計では、交通事故死の約5倍の3.2万であった。自殺が青年期の死因の第一位として挙げられる。深刻な事態と受け止めた政府は、2006

表2 「自殺に対するとらえ方」

- ・この世に何の価値も見いだせずに苦しみから解き放されたい時、目の前の現実から逃げる最後の手段。
- ・切迫つまって、辛いこと苦しいことから逃れるため。生きる自信と気力が無くなる時、自分に耐えられなくなる。
- ・周りの状況に自己の心身が耐えられなくなり、その苦しみから脱出しようと思うため
- ・絶望感に捉われ抜け道を見い出せなくなった時か。
- ・生きていく理由や意味を感じられなくなり、生きていても苦痛しか感じられないと思うようになるから。
- ・自分の存在価値を探すのをやめるとただ生きているだけになり、ただ生きているのは死んでいるのと同じだから死に向うのかも。
- ・一面的な考え自分のことだけに捕らわれ大きな視野で周りの人々や家族が見えなくなって自分にしかベクトルが向かない。
- ・身近かに人の死を経験したことがなく、残された者の悲しみを考えたことがない者がすること。
- ・TVドラマにおいて簡単に自殺シーンを放送したり、一部美化してしまっていることや、芸能人の自殺などが原因だと考える。
- ・自殺は究極の自己満足。ある意味、自己中心、自己顕示の強い者でないと自殺を実行出来ないと思う。
- ・自分の意志で生死を決めたいからだと思う。ヒトは死について考えることのできる動物
- ・人は衝動的に自殺を考えるとと思う。この世で生きている意味がないと思ったときにその解決策として死を選ぶ人が自殺する。
- ・自分の死によって何かを訴えたい、自分を主張したい時。

年6月に自殺対策基本法案を成立させたが、しかし、残念ながら自殺予防のために教育分野での充実を図るといったようなことではない。この法案では、自殺対策を総合的に接近するとして、(1)自殺の防止、(2)自殺者親族の支援、(3)健康で生きがいをもって生きる社会の実現を図る、としている。しかし、これによって自殺予防教育としての「死生学」が導入されるかは明確に示されていない。

従来から学校教育で、道徳・情操教育の充実を図る「ゆとり教育」の中にその充実を求める声はある。ただし道徳教育の内容自体はしつけや善悪判断などの従来型の道徳観教育が中心で、死生観教育の観点から行われた事例はない。

ところで、今回の「死生学」講義における授業評価として、自殺の捉え方は表2にまとめたようにさまざまであったが、自分の死について思索したり、生と死の関係性を考えたりすることによって、いのちの大切さを深く洞察できるようになっていることからしても自ら死を選ぶことの予防に繋がるだろうと思われる。

表3は、「生と死の関係性について」の問いへの応えの一部である。

“生と死は必要に興味深いものだが、まだまだ死を身近に感じる事ができないというのが現状である。ただし、将来必ず直面せねばならないものであるから死を必要以上に恐れないように今後も深く関わって

きたと思う。”

“死を受け入れた上で、人生を生きることで本当の生の意義を知ることができるのだと思う。”

“死を考えることが生を見つめなおすことにつながり、毎日の生活の中に生きる意味を感じる事ができるのではないか。”

“死というテーマの講義はこれまで一度も受けたことがなかったため新しい知識であるはずなのに、私は新しいとは決して思わなかった。それは、まだ死には遠い年齢にあるはずなのに死という感覚は決してわれわれから離れないということが生活してはつきりと感じられるからである。”

“死をみつめるということは人によっては勇気のいることかもしれないが、生きていくために必要なことであるということがよく分かった。”

“死に対する恐怖は当然ある。しかし、全ての人間にとってそれは避けられないものであるし、死後どうなるのかということも誰も知らない。生命活動の停止だけが死の定義ではないはずである。そこで死ぬということが一体どういう意味を持ち、またそれと密接に関わっている生というものは何であるのかを考えていこうと思う。人が死に至るまでの過程も一つではなく、

表3 「生と死の関係」

<ul style="list-style-type: none"> <li>・生とは価値のあること、死とは意味のあること</li> <li>・死を意識することによって初めて生きていることを自覚したり、愛することもできる</li> <li>・生きていることは素晴らしい、死ぬことも素晴らしい。生きているときはその人の人生は自分のもの、死んでからは他人のもの</li> <li>・死があるからこそ生は限られたものとされ、輝き尊ばれるもの</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生と死は始まりと終わり。始まりがあれば必ず終わりがあるように生きているということは死が訪れるということ。</li> <li>・死は生をより充実させるために存在する</li> <li>・一生は一冊の本のようなもの。終わりのない物語りはない</li> <li>・生きている時が素晴らしく感じられるために死がある。必ずやってくる死はいつ訪れるかわからない。だから生を尊いと思って生きることができる。</li> <li>・相反するものがあるからこそ夫々の価値が見い出される</li> <li>・生と死は隣り合わせ。生を考えることは同時に死を、死を考えることは同時に生を考えること</li> <li>・死は生の延長上にある一つのもの。どちらも生きているものすべてにとってとても重要なもの</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・私たちは永遠ではなくいつかは死ぬとわかっているからこそ、今を輝かしく生きていけるのだと思う</li> <li>・死の厳かさを本当に知ることによって今の生の尊さを知ることができる</li> <li>・生がある限り死がある。死があるからこそ新たな生がある</li> <li>・生と死、つまり始めと終わりがあるのは仕方ないと認識してその途中の過程である「今」を精一杯生きる</li> </ul>
---

寿命死、病死、事故死、脳死…など様々であるが、この中でも事故死は自分の中での死への覚悟が出来ておらず肉親らに与えるショックも大きいであろうと思われる。…”

現在わが国では、高齢化社会の中で核家族化がすすみ、老いて行くこと死んでゆくことを直接に知る機会もなく、また在宅で死を迎えるかつての死の自然な姿に接することは非常に少なくなった。

死別に伴う感情は人の最も根源的な辛い体験である。身近な肉親や友人を亡くすという喪失と別離の体験は大きな衝撃を人に与える。愛する対象を失った時どういう状態に陥るか、どんな段階を得て立ち直りに至るのか、人間として誰でも味わう喪失体験に伴う嘆きについて学ぶなど科学として死生学を学ぶ必然性がある。

表4は、「あなたが生きがいと充実感を感じることは何ですか。」に対する応えの一部である。分類的に見るとその内容ははっきりするため、仮に、生きがいや充実感を精神・身体的側面、社会的側面とに分けてみた。そうすると個体として捉えた場合の表現もあれば、家族や友人など他との関係においてのものもある。さらに、自然のなかで感じる幸福感も記述されている。人が生きるという欲求のなかで、最も大きなものは、D. カーネギの『人を動かす』（『How to win friends and influence people』1936, Simon and Schuster 初版）の著書中で、「人が求める究極、最大の欲求は、“人に

必要とされているという感覚”である。これこそが人を動かすエネルギーとなる」ということである。学生たちは、生きがいや充実感を感じるのは、“目標に向かって努力し、その結果が得られた時である”と記述している。“人は、命を賭けられる何かをもっているからこそ生きていられるのではないだろうか”というもある。受講生たちは、自らの言葉で見事に真理を喝破した。

表5は、「自己存在のあり方」についての応えの一部をまとめたものである。

実存主義を唱えたドイツの哲学者M. ハイデッガー（1899-1976）は『存在と時間』（1927）の中で、“人間は死への存在”と定義した。“人間存在は死によって完結するが、死を迎えると現存在が存在することができない。したがって現存在は常に可能性としての死から自らを規定しなければならない”という。彼は仏教思想との出会いのなかで、特に道元の『正法眼蔵』（1240）の中の存在と時間に触れた「有時の巻」に影響を受けたといわれる。われわれ日本人は仏教思想の影響を何らかのかたちで受けるが、学生レポートの中に、“生”と「死」つまりはじめと終わりがあるのは仕方ないと認識して、その途中の過程である今を精一杯生きる。”とある。

一期一会の考え方がここに述べられているが、やはりわが国の伝統文化としての死生観の代表的な思想の表現である。

“講義を受けて、死に対する考え方が変わった。死

表4 「生きている充実感を覚えるとき」

<p><b>精神的な側面</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夢をもって将来に自分を見つめ、それに向かって努力している時</li> <li>・自分の目標に向かって努力し、成し遂げた時。それに伴う困難が大きければ大きいほど充実感は大きくなる</li> <li>・自分の経験が生かされた時や、自分の決めたことを実行できた時</li> <li>・いろいろなことで、自分が生まれてきて良かったなあと思う時</li> <li>・自分のやりたいことを自由にやっている時</li> </ul> <p><b>身体的な側面</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・おいしいもの・好きなものを食べる時</li> <li>・楽しくスポーツなどで体を動かした時、部活動で汗をながした時</li> <li>・すきなだけ眠った後</li> <li>・自分の時間をゆっくり過ごす時</li> </ul> <p><b>家族・友人関係</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かに必要とされ頼られていると感じる時(自分の存在が認められ人や友達の助けになれた時)</li> <li>・家族や好きな人・友人という時</li> <li>・友人と協力して何か行動する時、自分のしたことを喜んでくれた時</li> <li>・人を信じ相手にも信頼された時</li> <li>・友達と心から打ち解けて話しをする時</li> </ul> <p><b>趣味など</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・趣味(音楽やスポーツ)に没頭している時</li> <li>・お料理をつくっている時</li> <li>・映画を観たり、音楽を聞くと</li> <li>・本などで感動した時／本を読みながらゆっくりしている時</li> <li>・演奏発表などで苦勞が報われたと感じる時</li> </ul> <p><b>自然とのふれ合い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・美しい風景・景色を眺める時</li> <li>・天気が良い、晴れの時</li> <li>・夕焼けを見る時</li> </ul>
--

は悲しいものだけではなく人が生きていく上で大切な存在であることがわかり、今しかない人生を精一杯生きていこうと思った。”とある。

最後に、受講生たちが「死生学」から学んだことを総括した。

①「自分自身のこととして」の捉え方

“生きることについてはよく考えることがあるが、死についてはあまり考えたことがないのでよい機会になった。若いから死とは縁遠いと考えがちだがいつも隣り合わせなんだという自覚だけは常に持っていたいと思った。”

“生も死も決して個人だけの関わりではなく、必ず周りとも関係しつながっているものであると言うことが強く印象に残った。”

“死について考えるというのは楽しい。考えている最中は鬱々とした状態になることもあるが、それを考えることが生きていることを分らせてくれるような気がするから。”

“死の教育は人間の根源的な問題であり、人間の永遠のテーマである。このような教育こそが現代のこころの教育の一つのヒントになるのではないか。”

“生と死の授業をきいて、人生の短さをあらためて認識した。どういうふうに死をとらえるかよりもどうやって悔いの無い人生を送るかを考えることの方が大事だと思う。”

②「死生学」講義の意義について

“いままであまり死について深刻に考えることがなかったから、今回の講義を受けて自分自身を考えるきっかけになり、死を身近かなことだと感じ大変興味深かった。”

“死の教育は、小中高大とどの教育機関でもしっかりやるべき。本気で取り組めば、いま学校で起きているいろんな問題も解決できるところがあるのではないか。”

“生と死の教育は今様々な問題となっている教育現場を見るにしてもとても重要なことだと思う。”



表5 「自己存在のあり方」

- ・自分が存在し、人に必要とされているということを見出すこと
- ・自分の大切な人たちと共に幸福でいること。自分が自分自身を認められること
- ・自分の安心できる場、人をもつこと。充実した健康な人生を歩みながら生きがいのあること
- ・心が安定していて、穏やかに生きる(幸福を感じ、健康に暮らす)ということ
- ・他人の痛みを知り、それぞれが自立しつつ助け合いながらも押しつけない生き方
- ・生きていく中で何らかの充実感や満足感を得る、また見つけだす。向上心を常にもって自分らしく生活する
- ・人間らしさ=自分らしさ。自分を精一杯生きていくことが重要であり、他と比較したり、他を否定するものではない
- ・自分をしっかり見つめポリシーをもち楽しく生きること。ポリシーや自分自身をしっかり持たないと生きていく意味がない
- ・今生きていることをしっかり自覚し、命というものの尊さをいつも胸に留めて無理のないように自分らしく日々を過ごしていくこと
- ・自分で死に方を選ぶ事が出来ること。積極的安楽死も認める。  
癌など重い病気であってもきちんと自分が知っていて死にたい
- ・他者から生命の危機に脅かされることなく安心して生活することが出来、満たされていること

“確かに身をもって死を体験したこともない私にとって難しい講義であった。しかし、生死を漠然とではあるが意識するようになった。”

“学校は、現在まで死という問題に対して非常にナーバスであった。その反動として死を知らない生徒が死に走るということもあったかもしれない。少なくとも我々くらいの年齢になれば生と死に対しては正面から向き合う必要もある。そういった意味で今日の授業は興味深いものだった。”

“最近死についてあまり考えないようにしていましたが、今日の講義を受けて、きちんと自分なりに死を理解すべきだと思いました。そして、それが、生を理解することではなかろうかと思いました。”

## まとめ

健康教育のテーマとしておこなった「死生学」の教育実践からその成果を検証した。

成果としては、「死生学」を受講しての死生観の形成にどのような影響を与えたか、死と生に対する考察の深まりが生じたかなどをレポートとして記述させた。

受講生の反応の一つとして、次の様なものがある。

“教育で人生の終わりを告げる「死」を説明できるのだろうか？「生」についてはかなり解明されているが「死」についてはまだまだ全てが謎なのだということがわかった。考えさせられる講義だった。”

確かに死を科学することはできないであろう。しかし、人生において死とは何か、死と向かい合って自分の命を最期まで生きるためにはどうしたよいか、死を深くみつめる死の哲学は命への気づきのために、またこの世の人生をよりよく生きるために必要不可欠な教育といっても過言ではない。それはそのまま本質的に生の意味を問いかける生の哲学、それが死生学であると捉える。

最近、子どもはテレビゲームで仮想（ヴァーチャル）の「死」「殺す」などのことばを絶えず耳にしたり、身体感覚をもつ経験が乏しいこと、またマスメディアを通して暴力や殺人シーンなどの映像や事件としてのテロリストによる無差別殺戮場面など刺激の強い情報が入り、死に対する感覚を麻痺させる可能性が高い。ここでは、命はリセットできるととらえる子どももいるほどである。

作家の熊谷達也に次の記述がある。“身近に死が氾濫していながら死の意味にも本質にも無頓着でいられるのが現代社会と現代人の特徴かもしれない。それとも、あまりに死が氾濫しすぎていて狂気に陥らないためには死に対して無頓着でいるしかないということなのか。いずれにしても、まったく健康なことではないと私には思えてならないのだが…。生と死はあくまでも表裏一体のものであり、命の大切さを語るためには生を語るだけでは不完全であろう。どうやら現代は、襟を正して死を見つめる機会をあえて意図的に設けなければならない時代であるのかもしれない”<sup>(3)</sup>。

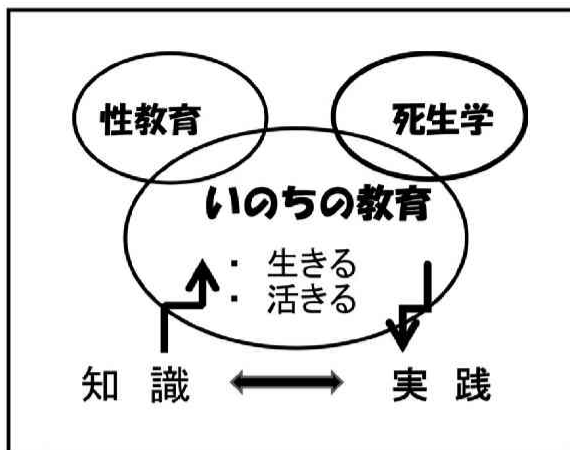


図1 「いのちの教育のモデル」

健やかに生きるための「いのちの教育」(図1)は、性教育と死生学を包含し、それぞれに正しい知識を学ぶこと、また同時にその正しい実践法を学ぶこと、さらに実践に移す行動力をつけることである。こどもの性を対象とした虐待や犯罪行為が増加し、“性を弄んでいるような現代社会で、生を大切にしようといっても説得力に欠けるのではないか”と受講生も言う。性教育では、性に対する考え方をこどもの頃にもしっかりもたせ、命の大切さを学ばせることが第一歩である。命の大切さが感じられるからこそ性教育の知識が役立つのである。

将来、教師として学ぶ過程の学生が次のように記した。

“こどもに「死」を教えることは必要である。思春期に「生き方」というものを考えるようになるからだ。その時に死を教えずに生き方を定めることは不可能である”。生命の尊さを理解し、かけがえのない生命を尊重する(指導要領「道徳」)ことが死生学の根底にあると言えるだろう。

#### 引用文献

1. A. デーケン「死とどう向き合うか」NHKライブラリー 1996
2. 川野哲也, 東谷孝一「いのちの大切さを考える: 保育士養成における授業実践」全国保育士養成協議会第46回大会 H.19.9
3. 熊谷達也「生を語るために死を見つめる」図書岩波書店 2006. 3
4. 志田久美子, 渡邊岸子「日本の看護におけるスピリチュアルケアと看護師の死生観についての文献研究」新潟大学医学部保健学科紀要8(2): 95-107, 2006
5. 志田久美子, 山本澄子, 渡邊岸子「看護基礎教育における「死の準備教育」についての検討—日本にお

る過去10年間の文献研究」新潟大学医学部保健学科紀要8(3): 133-141, 2007

6. 齊藤英子, 林かおり, 藤野文代「大学生の死のイメージに関する研究—TEG・Self Esteem・身近な人の死の経験による分析—」群馬保健学紀要23: 49-53, 2002
7. 高内正子「幼児に対する“いのち”の教育—絵本を通しての一考察」乳幼児教育学研究第14号: 133-144, 2005
8. 與古田孝夫, 石津宏, 秋坂真史ほか「大学生の自殺に関する意識と死生観との関連についての検討」民族衛生第65巻第2号: 81-91, 1999

#### 参考書

1. 岩切政和編「人間存在の探究」創言社 1992
2. 近藤卓「いのちを学ぶ・いのちを教える」大修館 2002
3. C.ロス, 川口正吉訳「死ぬ瞬間」読売新聞社 1971
4. 佐々木勉郎「日本人の死生観・医療と生命倫理」丸の内出版 1999
5. 多田富雄, 河井隼雄編「生と死の様式」誠信書房 1999
6. M. ヴォーヴェル, 池上俊一監修「死の歴史」創元社 1996
7. 読売新聞大阪本社編「いのち見つめて—終末期医療の現場から—」ブロンズ新社 1998

(平成19年11月28日受理)